（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	常深　浩平
論文題目	物語理解過程における知覚的処理　－自伝的記憶に基づく検討－		

（論文内容の要旨）

本論文は、物語と知覚の関連を、読者の知覚的経験を主要な要素として含む記憶の集合である自伝的記憶を手掛かりに、認知心理学的な実験法と質問紙法を用いて実証的に解明したものである。 6章、6つの研究から構成されている。

第1章は「序論」である。物語理解研究の基本的概念を整理し、従来の主要な認知心理学理論について論じている。1節では、本論文の問題を提起し、2節では、物語理解時の読者による心的表象の形成、3節では、本論文の目的と意義、4節では、全体の構成について述べている。

第2章「言語理解時の知覚的処理」では、内外の研究動向を概観している。1節では、単語と知覚的処理、2節は単文と知覚的処理、3節は短文と知覚的処理、4節は長文と知覚的処理、5節では脳研究などの関連研究、6節では理論について検討している。7節ではその問題点について展望している。

第3章「物語長文理解時の知覚的処理：実験的検討」では、1節において、研究1、2、3で用いる実験的手法の概要を述べた。2節(研究1)は、物語長文理解時における知覚的情報の関与を、事前に知覚的情報を想起した場合に限り、自分の経験と読解内容の類似度が高い参加者の読み時間が増加することを通して示した。3節(研究2)は、物語長文理解時における知覚的情報の関与を、自伝的記憶内の知覚的情報が読み時間を増加させることを通して示した。4節(研究3)では、物語長文理解時において、個人的ではないが強い知覚性を持つ知覚的記憶の想起によっては、読み時間が増加せず、自伝的記憶の関与が必要なことを示した。5節（研究4）では、物語長文理解時における自伝的記憶と感情の関係を発話思考法によって検討し、知覚的情報が読解中の感情生起を促し、特に自伝的記憶が物語への共感を促すことを示した。

第4章「日常の読書経験における知覚的処理・質問紙法による検討」では、 1節（研究5）において、49人の大学生に対する質問紙調査、2節（研究6）では、20-60代の800人の市民に対して、質問紙調査によって、普段の読書経験を検討し、読書の意義は読書を通して得られる「感情」「知識」および読書の「功利性」の3つに分かれた。さらにパス解析の結果、感情体験を目的とする読者は、物語読解中に知覚的処理が促進され、物語世界への没入が生じ、自伝的記憶が想起され、感情が生起すること、さらに、読書量の増加や読書への好意度につながることを見出している。

第5章「物語と自伝的記憶：擬似自伝的記憶モデルの提案」では、1節において、物語研究の問題点として、物語長文理解に特化したモデルが欠如していることを指摘し、2節では、物語長文読解時に形成される心的表象は、自伝的記憶の構造と知覚的処理がその基礎となることをこれまでの結果に基づいて示した。3節では、擬似自伝的記憶モデルを提案し、その性質と先行研究との関連について論じている。

（続紙　２　）

第6章「総合的考察」では、1節において、第1章から第5章までで得られた知見についてまとめ、相互の関係について論じ、2節では、今後の展望を述べ、3節では論文の意義について述べて全体をまとめている。

注)論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は１頁を３８字×３６行で作成し、合わせて、３，０００字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、４００～１，１００wordsで作成し審査結の要旨は日本語５００～２，０００字程度で作成すること。

（続紙　３　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、物語と知覚の関連を、読者の知覚的経験を主要な要素として含む記憶の集合である自伝的記憶を手掛かりに、認知心理学的な実験法と質問紙法を用いて実証的に解明したものである。オリジナルな実験材料と実験パラダイム、調査項目を用いて、６つの研究を行い、さらに、物語理解を説明する擬似自伝的記憶モデルを提案している。

本論文の特色は以下の3点である。

(a) 従来十分に解明されていなかった、物語読解における知覚的な自伝的記憶の役割を、工夫した実験を積み重ねて明らかにしている点
(b) 成人対象の大規模調査によって、読者のもつ読書の目的と物語の読解過程、読書量、読書好意度との関連を明らかにしている点
(c) 物語読解の認知過程を説明する独自の擬似自伝的モデルを提起している点

第1章では、物語と読者、心的表象の構築について内外の研究に基づき議論した上で、本論文の目的として、物語文章理解における知覚的な自伝的記憶の役割に新たに着目した点に、着眼点の鋭さが見られる。

第2章では、言語理解時の知覚的処理の点から、単語、単文、短文、長文の理解に関する内外の研究を検討し、物語長文の研究が少ないという従来の研究の問題点を指摘し、疑似体験の基礎過程としての自伝的記憶内の知覚的情報処理に焦点を当てて、本研究の目的を明確化している。

第3章の研究1から研究4は、巧みな実験手続きによって、物語長文理解時における、自伝的記憶内の知覚的情報の関与を明らかにした点、さらにこれらが感情生起、特に共感を促進することを示した点は、この分野における重要な貢献である。

第4章では、20-60代の成人の読書経験を、工夫された項目群を用いた質問紙調査とパス解析によって、読者の目的から、物語読解中の知覚的処理、物語世界への没入と自伝的記憶の想起を介した感情生起のプロセスを明らかにした。さらに読書量の増加や読書好意度につながることを見出したことは、この分野に新たな知見を加える貢献である。

第5章では、物語理解を説明する擬似自伝的記憶モデルを提案し、読解時に形成される心的表象が自伝的記憶の構造と知覚的処理に支えられていることを体系的に示した点は、そのオリジナリティを高く評価できる。

第6章の「総合的考察」において示された研究全体をまとめるフレームワークは、文章からの情報と読者からの情報が、理解時の心的表象としてどのように統合され

（続紙　４　）

るかを、従来のモデルを踏まえて、説明されており、この研究分野の理論的展開への貢献である。さらに、今後の展望として、物語以外への応用や教育への応用について論じている点は、評価できる。

以上のように本論文は、物語理解時における知覚的処理について、自伝的記憶に基づいて検討するという独創的な着想に基づき、新たに開発した実験法や質問紙法を用いて、重要な多くの成果をあげているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

(a) 実験研究の重要な指標である読み時間の構成要素について、さらなる考察が必要なこと
(b) 実験研究において、個人差要因の統制、物語材料の一般性、物語への没入要因に関して、さらなる検討が必要なこと
(c) 擬似自伝的記憶モデルに関して、自伝的記憶との機能的共通性や差異性、意味記憶との関係、知覚過程と運動過程の区別、適応的意義、一般化の限界について、さらなる考察が必要なこと

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値をいささかも損なうものではない。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年8月31日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降